

(2) 竹島小学校

学 校 長 太宰 三和
校内研究代表者 加藤 百香

1 研究主題

「主体的に問題解決に取り組み、対話を通して深い学びに向かう授業作り」
～学習リーダーを活用して～

2 主題設定の理由

今年度は教育目標『たくましく未来を切り拓く児童の育成』のもと、研究主題を『主体的に問題解決に取り組み、対話を通して深い学びに向かう授業づくり～学習リーダーを活用して～』とし、①児童が自ら問いを見つけ、粘り強く問題解決に向かっている。②見通しをもとに自分の思いや考えをもち、数学的表現を用いて表現している。③互いの考えを伝え合う活動を通して、自分の考えを広めたり、深めたりしている。以上3点を目指す児童の姿とし、日々の授業づくりや目標到達を目指すこととした。

本校では、児童数の減少に伴い、昨年度、複式学級が設置された。今年度も2・3年生、4・5年生が複式学級となっており、来年度以降も複式学級の設置が予想される。学習指導要領においても、資質・能力の三つの柱を育成するために主体的・対話的で深い学びの実現が強く求められているように、単なる知識の習得でなく、課題を自分ごととして捉え、生きた知識として習得しながら主体的に深い学びに向かうことのできる力が重要となる。本校でも、担任が片方の学年に関わる間も、児童が手を止めることなく、自力で、または児童同士の対話を通して学びを深めていく力がこれまで以上に求められるようになって考えられた。そこで、この状況を児童の主体性を伸ばすプラスの機会と捉え、学習リーダーを活用して深い学びに向かう授業づくりについて研究を進めていくこととした。また、ICTを活用した個別最適な学びの推進が進められる中で、学習リーダーの働きかけは、「一人学び（個別）」の後に得られた多様な考えを「対話を通じた協働」へとつなぎ、「深い学び」へと向かうために重要になると考え、学習リーダーを核として深い学びに向かう授業づくりを目指していくこととした。全教員が、目指す児童についての共有を図り、学習意欲を高め、学びの価値や自身の向上を実感することのできる授業づくりを目指し研究を進め、児童一人一人の未来を切り拓いていく力に繋げていきたい。

3 研究の進め方と方法

(1) 研究仮説

児童が自ら問いをもち、自分の思いや考えを数学的に伝え合う活動を通して、自分の考えを広めたり、深めたりすることができれば、主体的に問題解決に取り組み、対話を通して深い学びに向かうことができるだろう。

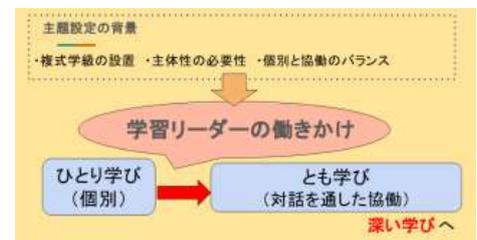
(2) 研究組織

○研修部会 学習部会（1年、4・5年、2・3年（教頭））
生活部会（6年、専科、あおぞら、養護教諭）

(3) 授業研究

・算数科の授業研究（1人年間1回）

○単元計画表の作成 ○学習リーダーの活用 ○対話（とも学び）を通して深める授業づくり



4 今年度の取組

(1) 基礎学力をつける取組

- ・学習規律の徹底 ・実践交流（ノート指導、マイベストノート（自主学習ノート）の充実）
- ・帯タイムの充実（新出漢字の指導の統一、下学年の復習の充実）
- ・自己表現できる場の設定（授業展開・生活朝会・発表朝会・行事後の感想 等）
- ・家庭学習の充実（家庭学習の手引き・学習ノートの相互交流及び評価）
- ・読書活動の充実（読書タイム・各学年の読書目標設定）

・NIE タイム・NIE の日（家庭学習）・新聞づくり・NIE コーナー（「地域の方のNIE コーナー」）

(2) 授業改善

- ・研究テーマ・研究仮説に基づく日々の授業実践 ・教材研究・授業研究の充実（算数科・講師招聘）
- ・授業評価表の活用（教師用も）

(3) 研究授業

教科	日	学年	単元・教材名
算数科	9月3日	6年	円の面積の求め方を考えよう
理科	10月17日	5年	ふりこの性質
算数科	12月3日	1年	ひきざん

○協議出された『今後の授業づくりで意識していくこと』

- ・言葉で書いていることを説明する時に、図を使用しながら説明する、式の意味を図でも表す。
- ・課題の終わった人は他のやり方を考えるなど、A評価にも触れる声かけをする。
- ・とも学びの説明の時の約束をする。（・指しながら説明、分かるところまで説明して、続きは他の子が引き継ぐ。・同じ考えの子は付け加えをしても良い。・共通点、相違点を考えながら聞く。・反応しながら聞く など。）
- ・具体物→図→式→言葉での順で表現させる。
- ・相手意識をもたせる単元構成。
- ・既習を活かす構成。
- ・単元計画表を見通しをもつためのもの、学習の足跡を残すためのものとして活用する。

5 今年度の成果（○）と課題（●）

- B 評価の児童の姿を共有することで、参観時の視点を絞ることができ、研究協議も視点に沿ったものとなった。また、B 評価が達成できたのはどんな手立てがあったからか、できなかったのは、何が足らなかったのかを柱に協議することができた。
- 学力調査結果分析で、教科ごとに分かれて早目に採点・分析に取り組み、学校全体として重点的に取り組む事項について確認したことで、それを授業づくりに生かすことができた。
- 学力調査の分析で課題に挙げた事項に、学校全体で重点的に取り組むことができ、系統性を理解することができた。
- 学習リーダーを活用した授業づくりの研究を進めたことで、子どもたちに自分たちで学びを創るという意識が芽生え、主体性に繋がった。
- 「みんなで練り合う、みんなが分かる」という意識の育成が深い学びの土台となった。
- 全員がリーダーを経験することで、リーダーではない時の意識や関わり方に変化が生まれ、協働の学びへと繋がった。
- 研究授業での学びを、自身の学級でどう生かしていくかを検討、確認する必要があった。何を実践するか検討、共有し、研究授業の反省点を次の学年に繋げていく。また、学校全体として、統一して取り組んでいく。
- 課題や意見の出方によって、内容が深まりきらないことがあった。一部の児童だけでなく全員が参加できる仕組みづくりや、多様な意見を統合して練り合う力を伸ばすこと、教師がいなくても深まる授業に向けての手立ての工夫について3つのことを意識して取り組んでいく。
 - ①導入の工夫…子どもが自ら問いをもち、解決したくなる教材提示の工夫。
 - ②任せる準備…子どもたちに任せ、子どもたちが気付いて創り上げていくという意識で、そのための手立て、準備を大切にする。
 - ③全員が学習者という意識を高める…全員が相手意識をもって聞き、反応する姿を育てることで、教師がいない時間でも深まりのある主体的な学びを目指す。